

## 俳句の中の夢（二）

池田亮二

足袋はいて寝る夜ものうき夢見哉 蕪村

靴下をはいたまま寝てみる夢は、どんなものか。物憂き夢というからあまりいい夢は期待できないかも。私はまだ試していません。蕪村翁は冷え性だったのでしょうか。

足が出て夢も短かき蒲団かな 太祇

布団が短かければ夢も短い。足袋なしでもせっかくいい夢をみていたのに蒲団から脚が出たばかりに途中で中断される。ままならぬものです。太祇は出家して坊主になりながら島原遊廓の中に住み、いつも酔っぱらっていたというから足を出して目が覚めてしまうのもしょうがないことです。蕪村と太祇は友人だったそうですから、二つの句は相聞句のようにも見えます。

こういうお気楽な句は、今日の花鳥諷詠の俳壇などには多分そぐわないでしょう。江戸の俳句の世界は、今日よりおおらかで広がったようです。

蝶々や乞食の夢のうつくしき 蓼太

垢じみた乞食が寝ていて、その上を蝶が舞っている。ちょっとマンガ的景色です。乞食の「夢も」ではなく「夢の」なのです。俗事にあくせくしている俗物よりも、どん底にある乞食の方が純粋に美しい夢の中で遊ぶことができるのではないかと。江戸の俳人らしい寓意が込められています。これはまた荘子の「胡蝶の夢」を暗示しています。荘子は胡蝶になって楽しく空を飛び廻った夢から覚めて、いったい自分は元来胡蝶であって、人間になった夢を見ているのか、と思うのです。汚い乞食は夢で蝶になって舞っているのか、舞っている蝶が乞食の正体なのか。

君や蝶我や荘子が夢ごころ 芭蕉

なにやら判じもののような夢の句ですが、芭蕉翁は友人からすばらしい筆を

もらって、それで書き物をしているのです。その筆が自由自在に動いて、勝手に詩や文が現われる。蕉翁は、その筆を荘子の胡蝶に見立て、自身はその蝶になって舞いながら詩文を書いているようだ、と言っている。ドラえもんの魔法のペンのような筆、私も欲しいものです。

やぶ入の夢や小豆の煮るうち                      蕪村

なんじゃこれ、としばし戸惑います。蕪村は古今の詩文を踏まえた暗喩をこめた句をつくるから、深読みしないと句意がわからぬことがある、と尾形侑氏は言っています。そこで、つらつら考えると、これは邯鄲の夢じゃないかと思ひ当たります。

年に一度の里帰り（やぶ入り）をした小僧のために、母親はおはぎでも作ってあげようと小豆を煮ている。そばで小僧がのうのうと昼寝をし始める。その夢の中で、小僧は手代、番頭となり、ご主人の美しい娘に見染められて入り婿となって店を継ぎ、とんとん拍子に出世して栄耀栄華をきわめ、栄華の果てに…。はつと目が覚めると、小豆はまだ半煮えのままだった。

小僧は邯鄲の書生、盧生のように人生を達観したかどうか。よい夢だったのか儂い夢だったのか。これは、私の独断の解釈ですが、これくらいの長い物語を十七音の中に込めるとしたら、蕪村先生さすがです。